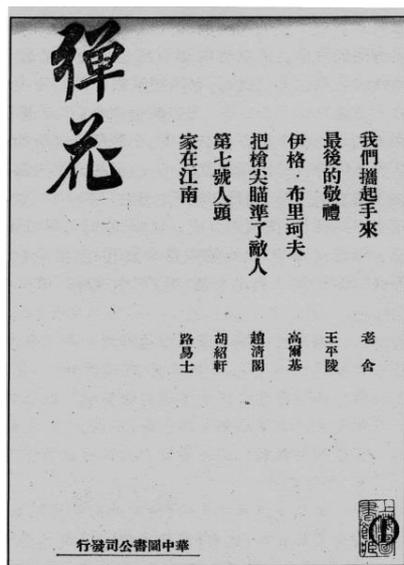


「文壇の思い出」より

武漢時代～重慶～北碚



『弾花』は1938年3月武漢で趙清閣の編集により創刊された文芸誌。中国語で「弾花」は「綿打ち」のことだが、「弾丸を放って勝利の花を咲かせる」という意味が含まれている。

『弾花』は武漢で五号まで出版されたが、戦況が緊迫したため印刷が困難になり、定期的に出版することができなくなった。それで重慶に撤退することを余儀なくされ、月刊が隔月刊になった。販路にも影響が出て、やっと五号までは出したものの唐性天（『弾花』の出版元、華中図書公司社長）は続刊を出すことを拒否した。彼はその代わりに、私が編集主幹になって『弾花文芸叢書』を出すことにしてはどうかと言い、私はそれに賛成したものの、定期的刊行物としての『弾花』を出すことを諦めなかった。唐性天が協力してくれなかったので自分で出すことにした。

当時私は編委会（教育部教科書編集委員会）の戯曲製作部で編集を担当していて、ほかの人たちが政府からの援助で刊行物を出しているのを知り、抗日戦と民族解放を宣伝するための雑誌『弾花』にもその資格はあるだろうと考えた。そこで教育部の部長で有名な教育家でもある中国画家の顧樹森先生に助けてくれるように頼んだ。（私が

編集委員会の仕事を得たのも先生のおかげであった。先生は、解放後は蘇州師範学院の教授になられた。）

彼は私の愛国精神を理解し、私のために教育部に支援の申請をしてくれた。毎月二、三百元の補助金をもらうことができるようになり、さらに“正中書局”で取次販売ができるように手配してくれた。売れたら四分六分の取り分で、紙代や印刷代を引くと儲けはいくらにもならず、原稿料はとても安かった。何人かの友達は一銭も受け取らず、編集費用は持ち出しだった。このようにしてやっとのことで出版を続けることができるようになった。



重慶爆撃

『弾花』が復刊されてから一年間、1938年3月から1939年4月まで、この時期にも重慶は毎日のように空爆された。警報が鳴るといつも原稿を持って防空壕に入り、その中で編集作業をした。

忘れられないのは、原稿を印刷所に持って行くというその日に“五四”の大爆撃①に遭ったことだ。警報の鳴る中、私は原稿を抱えて印刷所に走った。だが大梁子通りが道路が通行止めになっていた。

① “五四”の大爆撃……日中戦争中の1938年12月18日から1943年8月23日にかけて、日本軍により断続的に218回にわたって重慶に対する空爆が行われたが、1939年5月4日に行われた大規模な空爆では多数の犠牲者が出た。

一軒の理髪店に飛び込むと、中にすでにたくさんの人が逃げ込んできていた。階段下でしゃがんでいると、突然大きな音が響き、ほこりが舞い上がった。みんなは泣き叫びながら階段に向かってきて、私の体の上にも積み重なった。近くに爆弾が落ちて店が破壊されたのだ。

爆撃が終わったあと、人々は急いで外へ逃げた。私はやっと息をして立ち上がった。頭が湿っているように感じたが、汗だろう思っていた。だが、洗面台の鏡に映った血まみれの額を見て、飛び上がらんばかりに驚いた。何と負傷していたのだ！ 緊張していたので痛みを感じていなかったのだ。幸いにも懐に入れていた原稿は無傷だった。直ちに走り出ると、道路には電信柱が何本も倒れていて、歩道には手足がなくなった遺体が横たわり、いくつもの血痕が残されていた。

空中には敵機がまだいてあちこちから爆撃の音が聞こえていたが、それらにはかまわず、ひたすら“文協(中華全国文芸界抗敵協会)”に向かって走った。文協の友人老舎と安娥^②たちがすぐに赤チンを使って傷口を消毒してくれ、額にガラス片が刺さっているのを発見し、「危ないところだった！」と言った。警報が解除されたあと、老舎は私と安娥を川べりの道を使って、通りを二つ越えたところにある住居まで送ってくれた。安娥は当時私と一緒に住んでいた。後になって彼女もこのときのことを散文に書いている。

②安娥(1905-1976)……詩人、作家。『漁光曲』『売報歌』など現在でもよく知られている歌の作詞家としても有名。抗日戦時には共産党員として後方の工作活動に従事した。

それから重慶では空爆が続き、私は肺病を患ったので北温泉に移り、女流作家沈櫻^③の隣人となった。陽翰笙^④もこの時に北温泉で療養していた。北温泉は勤務先の編委会がある北碚(重慶の北西部に位地する地区)に近かったのだが、半年足らずで勤務することができなくなった。許心武^⑤の不満を買ったのだ。私はきっぱりと辞職した。

『弾花』は復刊後、1939年5月から1940年の7月まで、続けて十号が出版された。しかし困難も多く、売れ行きは悪く販路がだんだん少なくなり、経済的に窮迫してきた。特に政治的な圧力が明らかになっていった。

私と教育部編集印刷部が出している『学生の友』(この責任者が許心武だった)の論争が発生した。『学生の友』が青年学生の左翼化を招く、という指摘を受けたのだ。私はそれに反発して“鉄公”というペンネームでそのことを非難した。それが政府(中華民国)の機嫌を損ねて補助金が取り消され、正中書局も取次を拒否し、結局『弾花』を廃刊するしかなくなったのだ。

③沈櫻(1907-1988)……女性作家。1934年に日本に留学して日本文学を学ぶ。ペンネームの「櫻」は桜に因む(本名は陳瑛)。

④陽翰笙(1902-1993)……脚本家、映画製作者。1938年、軍委員会政治部第三庁主任秘書に就任し、周恩来の助手的な存在として働いた。

⑤許心武（1894-1987）……水利専門家、教育家。中華人民共和国成立後は共産党に入党し、水利事業の専門家として活躍した。

私は最後の号の「編集後記」にこう書いた。「本誌の生命と編集者の生命は、共に明日にはどうなるかわかっていない。敵機の爆撃、食糧、そしてすべての困難のために、今日は生きられても明日生きていられるかどうか。本誌も爆撃、経済的なこと、多くの問題のせいで、今号が出たからといって次号が出るかどうかはわからない。

このような状況は決して今にはじまったことではなかった。二年間はいつでも消滅の危機があり、ただ現在は、もう死に瀕しているという状況だったのだ。自分の力には限界がある。どうしようもなく、ただ涙を浮かべて叫ぶしかなかった。」

編集後記で「すべての困難」「たくさんの問題」と書き、直接的な表現は表現しなかったが、内容は明らかだった。

『弾花』は二年間で合計十五号出版された。自分の能力には限りがあり編集者として任務を完遂することができず、そのために考えていた効果は期待できなかった。しかしただ一つ胸を張って言えるのは、『弾花』は徹頭徹尾、民族解放、抗戦救亡のために戦ったということである。

郭沫若^⑥が1940年の夏の盛りに北温泉に来たとき、『弾花』はすでに瀕死の状態にあった。私と彼がこのことについて話すと、彼は私に「錦心一弾花」を詠みこんだ詩を贈ってくれた。私は笑って「錦心」は「苦心」に変更すべきだと言ったのを思い出す。『弾花』のために私はさんざんな苦勞をして馬鹿力を発揮したのだ！

この“馬鹿力”というのは女流作家の方令孺^⑦が使ったもので、彼女は、私が貧困と病の中で困窮し苦勞しているのを見ていたので、私が『綿花』のために払った代価は大きすぎると思っていた。

今でもこのことを思い出すと、私にとってはとても現実的な意味を持っているように思われる。私に後悔はない。

⑥郭沫若（1892-1978）……文学者、歴史学者、政治家。1927年に日本に亡命。建国後は婦政治家としての道を歩いた。

⑦方令孺（1897-1976）……散文作家、詩人。1923年アメリカに留学。帰国後青島大学や復旦大学で教職に就く。中華人民共和国成立後は上海市婦人連盟副主席となった。

□□□□□